

芭蕉翁生家

松尾芭蕉（1644～1694）の生誕の地と呼ばれることも多いこの建物は、芭蕉の誕生前後の松尾家の家であった。芭蕉が成人するまでに、彼の兄はそこに自分の家庭をもった。芭蕉は、伊賀に戻るたびにここに滞在し、家族と一緒に暮らした。釣月軒という小さな小屋が芭蕉のために増設された。この「月を釣る家」の意味の小屋で、芭蕉は最初の句集「貝おほい」を1672年に執筆した。釣月軒の外には、後にバナナの木が彼の思い出に植えられた。

句碑が松尾邸の外にあり、次の俳句が詠まれている。

ふるさとや へそおになく としのくれ

これは、将来の健康を願うために、子供の臍帯を保存する日本の習慣を指している。両親は伝統的に子供が結婚するか家を離れるまで臍帯をしっかりと保存しておく。旅の途中、芭蕉は母親が亡くなったことを知った。家について母親が大切に保管していた臍帯が、母親を思い起こさせ、二人を結びつける唯一の所有物であることを知った。句の最後の行の「としのくれ」は、年末を指す。